

あらゆる子どもへの表現指導の実態調査から見た 領域「表現(身体・音楽・造形・言葉)」の検証II

○尾崎公彦・青井則子・入江慶太・秋政邦江

(川崎医療福祉大学 子ども医療福祉学科)

1. 目的

本研究の目的は、保育者の子どもに対する表現指導(音楽表現・造形表現・身体表現・言葉表現)の実態を明らかにし、それらをフィルターにして、領域「表現」に関するモデルカリキュラムとの関連を検証し、課題点を抽出し授業開発に役立てる視座を獲得することにある。

2. 背景

領域「表現」に関する研究は様々な側面から行われており枚挙にいとまがないが、その多くは授業研究¹⁾であり、養成課程(領域「表現」)で学んだことが、子どもの豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにすることに活かされているのか、その実態を調査した研究はほとんどない。これは、領域「表現」が、大きく分けて「身体表現系」「造形表現系」「音楽表現系」という3つの非常に幅広い分野で構成されており、それぞれの学びの成果をどう捉えるかという指標の作成が困難なため、卒業後の総合的な検証が難しいことが一因であると考えられる。

そこで、本研究では筆者らが前回文部科学省「幼稚園の養成の在り方に関する調査研究」²⁾で示された「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラム「幼児と表現(1単位)」の中から、「(1)幼児の感性と表現」「(2)様々な表現における基礎的な内容」のそれぞれの到達目標8項目と、「保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」のモデルカリキュラム「保育内容『表現』の指導法(2単位)」の中から、「(1)領域『表現』のねらい及び内容」「(2)領域『表現』の指導方法及び保育の構想」のそれぞれの到達目標9項目について実態調査を行い、保育者が比較的苦手とする5項目を明らかにした³⁾。それは次の内容である。

- ①領域「表現」の位置づけの理解
- ②表現を生成する過程の理解
- ③素材の特性を生かした表現
- ④表現することの楽しさ
- ⑤情報機器の活用

その原因が養成課程における教授内容や方法にあるのか、保育者自身の特性(苦手意識や未学習など)にあるのかは、項目ごとに質的な検証が必要であると考え、有意差が認められた5項目について、現役保育者に質的調査(インタビュー調査)を行い、具体的課題点の抽出を行う必要性を感じた。

本研究の特色は、領域「表現」分野において力点を置くべきポイントが明らかになることである。得られ

た成果を、実効性のある領域「表現」のカリキュラム開発に活用し、これからの時代の保育者に求められる資質能力の向上に寄与したい。

3. 方法

(1)調査対象と属性

<対象者>

A短期大学保育科卒業生の中で、「岡山県内」「香川県北部・広島県東部」の2地区を設定。その中でさらに「新卒者」「卒後2~5年未満」「卒後5~11年未満」の枠を設け、候補者を絞った。これら設定した6カテゴリーのそれぞれのカテゴリーの中から、無作為抽出法(候補者をナンバリングしカテゴリーごとに表計算ソフトにより乱数を発生させ選出)により2名ずつ選定(合計12名)。(すべて女性)

(2)調査方法

返却のあったアンケートを集計したのちに、有意差が認められた5項目について、20分程度のインタビューを行う。インタビューは、研究同意後、調査対象者がリラックスした状態で受けることができるようにするために半構造化面接の形式で実施した。

また、本研究の遂行にあたり、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認(受付番号18-066)を得ている。

<実施場所>

インタビューの了承が得られた調査対象者の勤務先(職員室や休憩室)

<調査期間及び調査時間>

令和元年9月~令和元年10月に一度訪問し、インタビューは40分から1時間程度で行った。

<調査内容>

前回のアンケート調査で明らかになった、保育者が比較的苦手とする5項目について、質的調査(インタビュー調査)を行なった。同時に領域「表現」に関して養成課程の中で何を身に付けておくべきか、回答を求めた。

4. 結果と考察

保育者が比較的苦手とする5項目について以下のような意見があった(意見は斜字で示す)。紙数の関係から各項目との結果と考察を同時に記す。

(1)領域「表現」の位置づけの理解について

- ・生活=遊び、遊びになると境界線がはっきりしないため、言葉での表現がしにくい。
- ・学生の際は、知識(授業)として「音楽」「造形」「ダンス」と分類されているが、仕事となるとはっきり分類できないことに気づいた。分けられないですね。

・言葉・文字・体・絵などで気持ちや感じたことを表現するもの。例えば、運動会では日頃言葉でしゃべらない子どもが体で表現するのが得意だったり、発表会で楽しく楽器を演奏したりするので、表現とは個性が見られるものだと思っている。

保育の現場では、表現が単独として機能するのではなく、生活＝遊びの中から、他の領域と連想しながら活動が行われており、総合的な視点を持って領域「表現」を学修しておく必要を感じた。

(2) 表現を生成する過程の理解について

- ・人前で演じる経験が、現在自信をもってできる経験となったように思う
- ・普段の保育で実践できていないと感じている。
- ・子どもの姿をとらえて、どういう経験をさせてあげたらいいのか、悩むことがある。ダイナミックな活動をさせるのが難しいが、他クラスの先生が隣の教室の机も使って、机いっぱい広げてスタンピング活動をしていた。枠を破った活動を見て参考になった。
- ・物的、人的環境もあり、先生の指導次第で子どもの表現は変わる。

他にも、子どもの年齢や発達段階に応じた、音楽表現、造形表現、身体表現など具体的な内容に踏み込んだ意見が多く見られた。指導するだけではなく、子どもの表現活動について説明をすることについても勉強しなかったと言った意見も見られた。実践力と共に、子どもの表現への理解をより一層深め、伝える視点の必要性を感じた。

(3) 素材の特性をいかした表現について

- ・自分自身が「自然体験」が少ない。現場の先生に気づかせてもらっている。そういったことを補える授業があればよかった。
- ・園庭には木・花がない。作ったもので遊ぶ経験を学校でもっとしたかった。
- ・自然の豆知識を学びたかった。
- ・材料だけを用意して、子どもが遊べる遊びを考えさせるような授業がもっと良かったかも。
- ・基礎が大切で、それを生かして自分たちで考えることが大切。
- ・子どもと一緒に散歩をして、一緒に自然を体験するような機会があってもいいかな。

保育者自らの自然体験の少なさは、今日の生活環境を考慮するといたしかたない所はある。こうした状況を理解し、養成校としても積極的に自然と関わり、遊びを作り出す経験を多く取り入れる必要を強く感じた。

(4) 表現することの楽しさについて

- ・一緒にやって面白いと思え合えることが大切。
- ・表現の苦手な子どもにどう準備するか。初めてのことには戸惑うことが多い子どもの姿を理解して、準備していくことが重要。
- ・子どもは、自分の作品を見るのも好きだし、他人の作品を見るのも大好き。
- ・認めてもらえることを大切にしている

・子どもと一緒にするとき、「こうしたら楽しくなるかな」と準備をするときに自分が楽しくなる。

表現することの楽しさについては、保育者自らが、楽しさを実感していること。また子どもが主体的にのびのびと取り組めること。年齢や発達段階に応じた子どもの表現を理解し、表現を共感できる視点を持つことの重要性が示されている。

(5) 情報機器及び教材の活用法について

- ・子どもの掲示物の振り返り(子どもや保護者に向けて)の際、写真を使うことはあるが、表現が豊かになるような使い方は頭になかったです。
- ・PC、タブレットは使う認識がないことと、子どもには見せてはいけないもの、という認識がある。
- ・誕生日会の最後に子どもの願いが紙飛行機になって飛んでいく(パワポのアニメーションを使って?)。
- ・エクセルとワードを使って、催しものの案内の作り方などを学びたかった。
- ・夢が広がるのならばいいが、使い方は思いつかない。子どもにいい影響があるかは疑問だ。
- ・PC教室を園でやっている。PCに馴染むことがねらい。PCなどの情報機器の使用については、子どもに与えることの警戒感を持っている保育者が多く、活用法にまで考えが及んでいない状況が大半であった。そのような状況においても、誕生日会での活用など、新たな取り組みを実践している事例も確認できた。エクセルやワードを用いて、催し物の案内作成についても、授業で積極的に取り組み、パワーポイントで楽しくプレゼンテーションすることを通じて、情報機器を筆やクレヨンのように使いこなす契機につながるのではないかな。

5. まとめ

本研究の目的は「領域『表現』での学びが、様々な保育場面における表現指導に活かされているのか」をモデルカリキュラム内の到達目標の達成度を手掛かりに明らかにすることである。これまでの領域表現の授業内容では、『何を』『どう教えるか』で考えた場合、後者の、子どもたちに『どう教えるか』という指導法を重視してきた。一方で、『何を』に該当する領域表現の専門的事項の重要性は認識しつつも、授業の枠のなかでは、伝え切れていなかったと言える。生きる力の基盤をつくる領域「表現」において、表現する意味を学生にしっかり伝える必要性を再認識した。

6. 参考文献

- 1) 平尾憲嗣・滝沢ほだか「保育者養成における音楽を用いた表現領域の学びについて—情景を想像する視点に着目して—」岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 研究紀要(51), 71-78, 2018.
- 2) 文部科学省「幼稚園の養成の在り方に関する調査研究」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm (2019/1/11 検索)
- 3) 尾崎公彦・青井則子・入江慶太・伊藤智里「あらゆる子どもへの表現指導の実態調査から見た領域「表現」に関するモデルカリキュラムの検証 I」第72回日本保育学会 ポスター発表, 2019.